

## 第19回「市長と語るタウンミーティング」を開催しました

1 日 時 令和8年2月9日(月) 午後6時～

2 場 所 善通寺市役所 4階 秘書広報課(特別応接室)

### 3 参加者

四国学院大学 教授 浜田 様

東中学校 教頭 足立 様

南部小学校 教頭 白川 様

善通寺市子ども会育成連絡協議会 大池 様

善通寺市の子どもたちのよりよい教育を考える会 森川 様

善通寺市の子どもたちのよりよい教育を考える会 山本 様 計6名

### 4 会議の概要

【テーマ】学校再編について

1. 開会

2. 主催者挨拶

3. 参加者紹介

4. 学校再編について 概略説明

5. タウンミーティング

6. 閉会

### 5 いただいたご意見

【テーマ】① これからの未来の小中学校の教育のあり方、現状の教育の良い点・悪い点について

発 言 者	ご 意 見
浜田 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域と学校が協働した子育て環境の維持と、先進的な不登校支援の継続が望まれる。善通寺市は NPO 等の活動が盛んであり、地域全体で子どもを育てる土壌があることや、転入者と共にまちづくりを行っている点は評価できる。また、不登校児童生徒が民間の支援施設に通うことを出席扱いとするなど、全国に先駆けた取り組みも行われており、これらは市の教育の強みである。</li> <li>・予測困難な社会を生き抜くため、真に「主体的」な子どもを育てる教育への転換が必要。「主体的」とは、本来は子ども自身が目標を決め、判断し行動することであるが、学校現場ではまだ誤解されているように感じる。AI の普及や多様化が進む中、企業や社会が求めているのは、指示待ちではなく自ら考え行動できる人材である。</li> <li>・子どもと大人が対等に向き合う「対話」の実践と、「見えない学力」の重視が必要。主体性を育む手段は、互いの意見を認め合い新たな答えを生み出す「対話」である。また、これからの時代は学歴以上に「非認知能力（見えない学力）」が重要視されており、保護者も含めた意識の変革が求められる。</li> </ul>
大池 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の間では、学歴や就職を重視する従来の価値観を持つ家庭もあれば、スポーツや自然体験などの「中身」を重視する家庭もあり、教育方針は多様化している。自身の家庭では子どもの自主性を尊重しているが、社会の変化が激しく、兄弟間でも教えるべき内容や接し方が変わってくることに、親としてどう対応すべきか課題を感じている。</li> <li>・地域活動の体験を子どもたちに残したいが、保護者の負担感と担い手不足が課題。自身が子ども時代に経験した子ども会などの活動を、今の子どもたちにも体験させてあげたいという思いがある。しかし、共働きやひとり親世帯の増加、コロナ禍の影響などにより、保護者が地域活動への参加を負担に感じる傾向が強まっており、世話役を担う人が減少しているのが現状である。</li> <li>・大人が楽しみながら地域活動に関わる姿勢を広めることが大切。活動の担い手が不足する中、地元出身者同士の繋がりなどを活かし、子どもたちを盛り上げつつ、大人自身も楽しんで活動に参加するという意識を持つことが、活動継続の鍵になると考えている。</li> </ul>

発 言 者	ご 意 見
足立 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校に来られない子どもが年々増加しており、その原因も友人関係だけでなく、家庭環境の居心地の良さ（ゲーム・ネット等）や、保護者の登校に対する意識の希薄さなど多様化している。学校現場だけで対応するには限界があり、家庭の教育力や協力体制に苦慮する場面も見られる。</li> <li>・高校の実質無償化により進学が当たり前となるなか、生徒の将来を考えると高校には進学させてやりたいという思いがある。しかし、現在の入試制度に対応するためには学習指導が優先され、本来必要とされる主体的な活動や多様な体験に時間を割くことが難しいというジレンマがある。</li> <li>・学校行事の精選や教員の働き方改革が進む中、学校だけで提供できる体験には限りがある。そのため、子ども会や PTA 活動を含めた地域の教育力が、子どもたちの成長にとってこれまで以上に重要になってくると感じている。</li> <li>・学習の定着や人間関係の構築が不十分なまま通信制高校へ進学することに対し、将来的な社会的自立への懸念がある。学校としては、まずは支援センター等を活用し、少人数での信頼関係づくりから始め、段階的に集団へ適応できるよう支援を行っているが、個々の状況に応じた対応には難しさもある。</li> </ul>
森川 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域行事や伝統文化を通じた「居場所」づくりと、次世代への継承が必要。自身の子どもたちが地元に戻り就職したのは、幼少期に地域と一体となって育った経験や、祭りなどの活動を通じて地域に「居場所」があったからだと感じている。こうした経験や達成感を未来の子どもたちへバトンとして繋いでいくことが、大人の役割である。</li> <li>・市内にある大学や医療機関と連携し、演劇やアート活動などを通じて子どもたちの表現力（非認知能力）を育む取り組みが成果を上げている。無いものを求めるのではなく、地域にある資源や特色を活かした教育を継続・発展させていくことが重要。</li> <li>・部活動の地域移行においては、専門的な技術指導だけでなく、用具の準備や整理など、地域住民がそれぞれの得意分野や経験を活かして関わるができる仕組み作りが必要。地域が一体となって学校を支えることで、教員の負担軽減やなり手不足の解消にも繋がるのではないかと。</li> </ul>

発 言 者	ご 意 見
白川 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 南部小学校でも児童数が年々減少傾向にある中、教育目標としてキャリア教育を掲げている。小学生の段階では具体的な将来設計は難しいため、まずは多様な体験や見学を通じて、将来の夢や目標を持つきっかけ作りを重視している。</li> <li>・ 地元企業等の見学や出前授業、消防署員の話聞く機会などを積極的に設けている。また、民生委員の活動に同行し、高齢者宅を訪問する「子ども民生委員」のような地域貢献活動も取り入れ、子どもたちが社会との関わりの中で自分自身の役割や、やりたいことを見つけられるよう支援している。</li> <li>・ YouTuber やアイドルへの憧れを持つ子どもも一定数いるが、実際に地元企業や消防などの話を聞くことで、その仕事に興味を持ち「ここで働いてみたい」と考える子どもが増えている。直接的な体験が、子どもたちの職業観を広げ、地元への愛着を育むことに繋がってくるのではないかと。</li> </ul>
山本 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自身の経験として、地元の伝統行事に参加できず疎外感を感じたことがあり、地域意識の強さが逆に壁となる場合がある。子どもを「集団」ではなく「個」として認識し、長く関わってくれる大人の存在が重要であり、その点で「子ども民生委員」のような取り組みは非常に有効であると感じる。</li> <li>・ 若者が市外へ出ることを無理に引き留めるのではなく、外の世界で経験を積むことを応援する姿勢が欲しい。その上で、将来的に40代、50代になった時に「戻ってきやすい」と感じられるような、寛容な地域づくりが求められる。</li> <li>・ 「主体性」などの教育以前に、家庭の生活基盤や親の養育力が不足しているケースへの対応が急務である。貧困や教育格差が連鎖しないよう、子どもへの教育だけでなく、親に対する福祉的なサポートを含めた包括的な支援に力を入れるべき。</li> </ul>

【テーマ】② 学校再編について望むこと

発 言 者	ご 意 見
浜田 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「子どもの権利条約」に基づき、子どもには意見を表明する権利があり、大人にはそれを聞く義務がある。学校再編という子どもに直接関わる重要な決定において、子どもの年齢や成熟度に応じた分かりやすい説明を行い、意見を聞く機会を設けることは不可欠である。</li> <li>・子どもの意見を単に聞くだけでなく、対話を通じた信頼関係の構築が重要。子どもの意見を全て採用するという意味ではなく、大人の事情も含めて誠実に説明し、対話を重ねるプロセスそのものが重要である。自分たちの意見が尊重され、まちづくりに参加しているという実感を持つことが、市への愛着や信頼関係の醸成に繋がる。</li> <li>・アンケート実施の前提として、十分な情報提供と説明が必要である。子どもたちにアンケートを実施する際には、単に希望を聞くだけでなく、市の現状や再編の必要性について、子どもが理解できる言葉で丁寧に説明する責任が大人側にある。</li> </ul>
大池 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者に対する、具体的な再編スケジュールの早期提示をしてほしい。多くの保護者は、自分の子どもがいつ、どこの学校に通うことになるのかという具体的な見通しを知りたいがっている。10年、20年という漠然とした期間ではなく、現時点での大まかな予定表を示してほしい。</li> <li>・単に学校を再編して建てるだけでなく、地域とのコミュニケーションが図りやすく、風通しの良い設計にすべきである。例えば、企業のオフィスのように学年や教室の間仕切りをなくすなど、連携や交流を促す空間づくりを検討してほしい。</li> </ul>
足立 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校再編によって1学年のクラス数や生徒数が増加した場合、教員の目が届きにくくなり、いじめやトラブルの発見が遅れる懸念がある。特に思春期の中学生は多様な問題を抱えており、不登校生徒への対応も含め、少人数で個別に対応できる体制が望ましい。</li> <li>・今年度から始まった東西中学校の合同部活動では、生徒間のコミュニケーションは概ね良好であるが、指導体制においては課題が残る。地域クラブへの移行期でもあり、平日の学校指導と休日の地域指導で指導者が異なることや、複数校の教員が関わることによる指導方針の齟齬などが生じやすく、トラブルの要因となり得る。</li> <li>・学校規模が大きくなればなるほど、生徒指導上のトラブルも増え、教員の負担も増大する。再編に際しては、教員が余裕を持って生徒と向き合えるような適正な規模や人員配置を検討してほしい。</li> </ul>

発 言 者	ご 意 見
森川 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校再編は、平成 27 年の文部科学省の手引きに基づき全国的に進められてきたが、10 年が経過し様々な課題も浮き彫りになっている。現在、文部科学省でも『「令和の日本型学校教育」を推進する学校の適正規模・適正配置の在り方に関する調査研究協力者会議』等で議論されており、合意形成のあり方や地域コミュニティへの配慮など、国の指針を踏まえた慎重な手続きが求められる。</li> <li>・多くの市民は、再編によって子どもたちの将来がどうなるのかという不安を抱えている。漠然とした計画ではなく、具体的なタイムスケジュールやロードマップを示し、検討プロセスを明らかにすることで、市民へ説明してほしい。</li> <li>・学校再編に対しては、学校を残してほしいという意見もあれば、再編に賛成する意見もあり、様々なステークホルダーが存在する。これら多様な意見を尊重しつつ、対話を通じて最大公約数的な合意形成を図ってほしい。</li> </ul>
白川 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災上の観点から、早急な学校再編の実施してほしい。南部小学校は土砂災害警戒区域に立地しており、災害時の避難経路も安全とは言い難い。子どもたちの命と安全を守るため、老朽化対策以前の問題として、早期の再編による安全な場所への移転を強く望む。</li> <li>・再編の是非そのものを子どもに問うのは難しいが、「どんな学校を作りたいか」「どんな体育館や運動場が良いか」といった具体的な施設・環境面についての意見であれば、子どもたちも積極的に発言できると考える。また仮に自分たちの通っている学校が再編によって廃校となる場合は、地域に残る子どもたちが使える場所としてどのような機能が欲しいか、子どもたちの意見を取り入れる機会を設けてほしい。</li> </ul>
山本 様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どものいない世帯も含め、地域住民が学校行事や活動に参加できるような、開かれた学校づくりを望む。学校が公民館のような機能を持ち、地域コミュニティの核となることを期待する。</li> <li>・新しい学校において、どのような子どもたちを育てたいのか、どのような社会を作っていってほしいのかというビジョンを明確にし、学校教育目標に反映させてほしい。</li> <li>・学校に行くことが「楽しい」までいなくても、「辛くない」と思えるような環境整備が必要である。校則や設備面、教職員や周囲の子どもたちとの関係性において、子どもたちが傷つく体験をしないよう配慮してほしい。</li> <li>・部活動の地域移行が進む中、子どもたちが安心して活動できるよう指導員の選定にあたっては、指導力だけでなく人間性も含めて慎重に見極めてほしい。</li> </ul>